

<前回>：後期オリエンテーション

後期：自然神学の新しい可能性

1. 言語・解釈学から聖書へ

1-1：リクール

1-2：マクフェイグ 11/5

1-3：リューサー 11/12

2. 聖書学の諸動向

2-1：イエス研究とクロッサン 12/3, 10

2-2：パウロ研究から 12/17

3. 聖書学から政治思想へ

3-1：聖書と政治思想 1/7

3-2：アガンベン 1/14

3-3：ジジェク 1/21

Exkurs

・アガペーとエロス 10/29

・脳科学からキリスト教思想へ 11/19, 26

<前提>リクール1

A. 言語の意味と指示、そして実在論

(1) カントとドイツ古典哲学の課題

(2) 哲学的象徴論の展開——自然／文化／宗教

4. Ernst Cassirer, *Philosophie der symbolischen Formen, Erster Teil. Die Sprache*, 1923.

5. 波多野精一『宗教哲学』(1935)、『宗教哲学序論』(1940)、『時と永遠』(1943)

6. リクール

7. Paul Tillich, "Das religiöse Symbol (1928)," in: *MainWorks*. 4, pp.213-228.
, *Dynamics of Faith* (1957), in: *MainWorks*. 5. pp.231-290.

(3) リクールの解釈学

9. Paul Ricoeur, *Interpretation Theory: Discourse and the Surplus of Meaning*,
The Texas Christian University Press, 1976.10. リクールの言語論の展開：象徴論→隠喩論→テキスト解釈学（1960年代～1970年代）
La métaphor vive, Seuil, 1975."Biblical Hermeneutics "(*Semeia*. 4, the Society of Biblical Literature, 1975, pp.27-148.)

< Language as Discourse >

1. Langue and Parole: The Structural Model

構造主義的モデル：意味は自己充足的な記号体系内部の関係である。歴史に対する構造の先行性。言語から人間文化の全領域へ。記号の恣意性（概念／感覚的イメージ）

2. Semantics versus Semiotics: The Sentence

語と文の言語階層の区別。→ 記号論と意味論

3. The Dialectic of Event and Meaning

言述における出来事と意味の弁証法。可能性と現実性、個別性と普遍性。「もしすべての言述が出来事として現実化されるとすれば、すべての言述は意味として理解される。」出来事の止揚と意味の保持。

4. Utterer's Meaning and Utterance Meaning

意味とは何か。話者の意味と文の意味。意味の非心理学的概念化。

日常言語学派・言語行為論：発話行為、発話内行為、発話媒介行為、発話相互行為。

コミュニケーション論へ

経験され生きられた経験の私事性と、その意味の公共性。印象から表現へ。

5. Meaning as "Sense" and "Reference"

言述<出来事と意味（意味と指示）>という二重の弁証法。

テキスト（テキスト世界）とテキスト外部の行為世界との統合機構。

Gottlob Frege, "Ueber Sinn und Bedeutung," (19)

distinction between semiotics and semantics

If language were not fundamentally referential, would or could it be meaningful?

Finally, semiotics appears as a mere abstraction of semantics. And the semiotic definition of the sign as an inner difference between signifier and signified presupposes its semantic definition as reference to the thing for which it stands. The most concrete definition of semantics, then, is the (21) theory that relates the inner or immanent constitution of the sense to the outer or transcendent intention of the reference.

the utterer's meaning has to be expressed in the language of reference as the self-reference of discourse, i.e., as the designation of its speaker at the same time that it refers to the world. This correlation is not fortuitous, since it is ultimately the speaker who refers to the world in speaking. Discourse in action and in use refers backwards and forwards, to a speaker and a world. (22)

6. Some Hermeneutical Implication

(4) 非実在論としての近代宗教批判

(5) カントの批判哲学を経た実在論（実在論の再興）

3. 批判的実在論：批判＋実在論

実在への関わりを心理や社会の内部の仕組みに還元しない。

それでも、人間は実在に触れることができる。偏狭な自然主義や極端な社会構成主義を斥ける。日常性の擁護。

実在への関わりの具体的な形態は、心理的社会的影響関係に規定される。

↓

宗教研究においては、

宗教現象の批判は必要であるものの、しかし、その実在的基盤は擁護されねばならない。シュライアマハー、トレルチ、ティリッヒ、波多野、リクール、ギルキー、ヒック、マクグラスなどなど。

4. 科学言語と宗教言語の共通の問題（「宗教と科学」関係論の主要テーマの一つ）

(6) 言語の指示機能と実在論・真理論

(7) 指示と実在をめぐって

8. 指示の記述説と因果説（芦名、160-167）

・指示の記述説（フレーゲあるいはラッセル）

固有名の指示はその名の確定記述、つまりそのものを決定づける諸本質の記述によってなされる。言語の指示対象の理解には対象の認識が先行する。

アリストテレス＝「プラトンの弟子であり、アレキサンダーの先生である」

・指示の因果説（クリプキ）

ある語句を使用する場合、その語句がそれに因果的に統合されている対象を何らか

S. Ashina

の仕方では指示言及すること、そしてその際に話し手はその指示対象を同定するための知識を持つ必要はない。

固有名は一種の命名式において（「私はこれをAと名づける」）、その名が与えられる対象を前にして導入され、その命名式の出来事は命名者とその場に居合わせた人々によって知覚され、その名をその対象を指示するものとして使用する能力は、この命名式を目撃者から、命名式に立ち会っていない人に伝達される（言語共同体と指示の因果的連鎖）。

↓

9. ソスキースは、この因果説を、「神は霊である」といった宗教言語に適応する。

伝統と聖書→言語共同体と指示の因果的連鎖。

権威と靈感

4. 言語・解釈学から聖書へ

4-1: リクール2

<問題>宗教哲学の可能性

・宗教的現実・宗教的実在とは何か。

宗教と日常性（→科学）との関係性

・言語・象徴の指示からアプローチする。

第一度の指示（日常的・直接的）から第二度の指示へのメカニズムとは何か。

神の言葉（言葉の出来事）とはいかなる言葉か。

↓

・リクールの三重のミメシスの議論を解釈学的プロセスとして展開し、聖書学の議論へ接続する。

第二度の指示とは、読解プロセスにおいて生成する新しい存在可能性の現実化を意味する。成功した（？）読書は、人間を豊かにし人生を転換する。

読解プロセスにおけるイメージ形成（形態化）。宗教は生の形態化である。

・モデル・ケースとしてのイエスの譬えの読解 → 説教の聴聞プロセスの構造分析

B. 三重のミメシス=解釈学的プロセス、テキスト・構造から指示・宗教的実在へ

(1) リクールと解釈学的プロセス

ミメシス1（読解以前・前提）

1. 「先行理解」(Vorverständnis)：作品の作成やその理解にとって前提。一定の視点から、一定の問題意識に従って、一定の期待をもってテキストに向かう。読解行為に先立つ先行理解（先入観）。我々読者の先行理解1

2. 「話者（イエス）－聴衆」（言葉の出来事1）：話者と聴衆の間には共通の実在（世界－自己）についての先行理解2。

3. リクール：物語の筋・プロットの作成が行動という実践的世界についての先行理解に基づいている（アリストテレス、行為の再現としての悲劇）。

4. ミメシス1（生・存在の形態→先行理解）：範列と連辞との二つの軸によって構造化されており、その具体的形態は文化的伝統によって規定される。

イーター：「テキストのレパートリー」(Textreperatoire)

＝作品の場面形成に必要な素材であり、テキストの構成に取り込まれた既存の知識。

ミメーシス 2 (読解過程)

5. テキスト作成のミメーシス 1 に基づいて現実化されたテキストは、その成立の状況(「話者-聴衆」状況) から切り離され自律的な存在として固定化される。

↓

テキスト：一定の完結した形態と構造を持つものとして読者の前に存在する。このテキストの固有の形態をミメーシス 2。

6. テキストはいくつかの小事件からその「主題」を問うるような意味ある全体として物語を構成し、多様な諸要素(ミメーシス 1 の範列次元にテキストのレパートリーとして用意されていた諸要素)を統合する。

7. ミメーシス 2：それに先行するミメーシス 1 とそれに後続するミメーシス 3 とを媒介。

8. イーザーの読解行為の現象学：読解のプロセスを導くテキストの構造上の特徴＝「テキストのストラテジー」(Textstrategien)

9. フッサールの現象学→読解過程の現象学

- ・ 読者はテキストの全体を一挙に捉えることはできない(射映)。つまり、テキストは一定の順序によって読み進められることによって、徐々にその全貌を現すという特性を持つ。
- ・ 読者はこの理解しようとしているものの内部で、次々に現れる様々な遠近法の視点(語り手、登場人物、虚構の読者などテキストの意味を解釈する様々な立場)を取りながら移動してゆく。

- ・ 読解過程で読者がその都度目を向ける断片がその瞬間の主題となるが、その背後には先ほどまで向かい合っていた他の諸断片(それまで読み進んできたそれぞれの箇所)が現在の主題の理解の地平として控えている。

- 主題-地平構造：読者が意味を理解する際の視線を調節すると同時に、テキストを遠近法の組み合わせとして統合してゆく。読者の期待を呼び起こし、そしてそれを修正させ、記憶に新しい変化を引き起こしてゆく。

- 個々の断片部分の意味内容は、この動的な主題-地平構造の内部で相互作用を行い、次第に変化し焦点が絞込まれてゆく(断片部分の意味の明確化)。それと共に、相互作用を通して蓄積された様々な視点とその組み合わせは、読者の意識の中に次第に統一的な意味の地平(首尾一貫して意味)を形成。

- ＝形態的意味(読解には視覚的イメージに類似のイメージ構成がしばしば伴う)、イメージ形成の自己修正的な動的プロセス。

- ・ 形態的意味(テキストの意味)：テキストの間主観的構造に基づくものである点では恣意的ではない明確な分析の対象となりうるレベルを有するが、この構造に基づいてそこに統一的意味(一つの脈絡、一貫性)を見出すのは読者の役割。

- ・ テキストのストラテジーに導かれて自動的に遂行される主観的なイメージ形成。

- ミメーシス 2 から 3 への移行。

10. テキスト構造：読解におけるイメージ形成を促進するようなストラテジー(コミュニケーション構造)が内在している＝「空所」(Leerstellen)の機能。

11. 読者の意識の中に統一的な形態的意味＝テキスト世界が投影される。

- ＝第一度の指示機能の中断を媒介として第二度の指示機能が開示されるプロセス。

- (言葉の出来事 2 = 自己の可能的世界の開示)

ミメーシス 3 (読解の帰結)

S. Ashina

12. 以上の過程を経てテキストの読解行為は最終的にはテキスト世界の受容・自己化による読者の実践的領域の再編＝生の再形態化へいたる（解釈学的プロセスの目標、新しい自己への転換）。

テキスト構造と読者のイマジネーションの相互作用→意識へと開かれたテキスト世界（一貫した形態的意味の世界：ミメシス2から第二度の指示へ）は、読者が外側から眺める対象としてではなく、読者の現実意識（現存在の在り方）において生成→感性レベルでの影響・フィードバックを生じる。エマオ途上のキリスト。

＝テキストという他者との出会いにおいて、古い自己の在り方への反省と新しく示された現実理解を自分のものとして受容するという作業

＝ガダマーの言う地平の融合

読者は自分自身が関与することによって形成されたイメージの世界に引き込まれ、感情を動かされ、そのイメージを自らの意味世界へと取り入れ、意味世界を再編する（テキスト世界の自己化による自己の拡張）。

13. イメージ形成と自己反省を媒介として自己自身の新しい発見（譬えの読解における神の国のイメージ形成とその自己化による自己変革のプロセス）

↓

キリスト教信仰の生成＝テキストの読解における「キリストの形」になる（生の形態化）。

＝ミメシス3

（2）イエスの譬えと読解プロセス

<イエスの譬え解釈の前提・仮説>

1. イエスの宗教（宗教運動と宗教思想）の解明という研究課題。

・19世紀のイエス伝研究の否定的総括

イエスの宗教を近代的市民社会の宗教、倫理的宗教から理解する試み、あるいは、テキストの伝承史的研究の方法論的限界＝近代聖書学の方法論の問題性（共同体と個人との関係を解明する方法論の哲学的基礎の不備、テキストの言語性理解の不備）

・テキストの歴史性、言語性（文学性）、思想性の分裂状況。特に聖書学と神学の対立。

↓

2. イエスの宗教の核心点としての「神の国」のリアリティー。終末論的あるいは知恵的。

宣教（内容と形式→神の国と譬え）、論争、癒し、共同的生（開かれた食卓）

このすべての活動を支える現実感覚・実感、権威は、何か。→「神の国」

3. イエスの譬え研究の意義

・「神の国の譬え」から神の国のリアリティーを理解すること

譬えの語りと読解において、神の国がいかなる仕方で我々の了解へと到来するのか（言葉の出来事）、それは何を引き起こすのか？→ミメシス3

・神の国とは何か？ というよりも、神の国は何をもたらし何を引き起こすのか？

どこで神の国の到来を知るのか？

→ この世の秩序を問題化し相対化し、流動化する別の秩序を指示する。人間存在のトータルなヴィジョン。人間は別様にあり得る（批判的ユートピア機能）ことを告げる。人間存在にいやしをもたらす。

・譬えは神の国を指示し現前させる、譬えにおいて神の国は経験へともたらされる。

聴衆をこの現実化のプロセスに巻き込む。人々は、イエスと弟子を中心とした一連の諸現象に神の国の作用を感じ取り、その現前を見た（第二度の指示）。

4. 譬え群から神の国へ：想像力（ミメーシス2）→意志・実践（ミメーシス3）
 神の国の到来の三段階のステップ：到来・発見、決断、行為
5. **Paul Ricoeur**, "Listening to the Parables of Jesus."
 What makes sense is not the situation as such, but, as a recent critique has shown, it is the plot, it is the structure of the drama, its composition, its culmination, its denouement. (240)
 a network of intersignification, to understand each one in the light of the other (242)
 Mt.13:45-46,47-49
 Three critical moments emerge: *finding* the treasure, *selling* everything else, *buying* the field (240)
 Event (the newness) / Reversal / Doing
 the event comes as a gift. (241)
 The power of this language is that it abides to the end within the tension created by the images. think through the richness of the images / metaphor (242)
 The challenge to the conventional wisdom is at the same time a way of life. We are first disoriented before being reoriented.
 reorientation by disorientation, extravagance
 this dramatization is both paradoxical and hyperbolic. (244)
 surprising strategy of discourse.
 To listen to the Parables of Jesus, it seems to me, is to let one's imagination be opened to the new possibilities disclosed by the extravagance of these short dramas. If we look at the Parables as at a word addressed first to our imagination rather than to our will, we shall not be tempted to reduce them to mere didactic devices, to moralizing allegories. We will let their poetic power display itself within us.
 poetic power of Parables / the Event / Reversal / Decision (moral) (245)
6. **J.D.Crossan**, *In Parables. the challenge of the historical Jesus*, Harper & Row, 1973.
7. **Sallie McFague**, *Models of God. Theology for an Ecological, Nuclear Age*, Fortress, 1987.
8. イエスの譬え → 神の国の現実の開示（第二度の指示）→共感的行動
 ・言葉の出来事：発見・驚き・喜び → 存在（構想力）の転換 → 実践
 ・受容されていることの認知（受容されていることを受容すること）
 acceptance of being accepted：ティリッヒ、自己との和解
 ↓
 開かれた食卓としての神の国、拡大され更新された家族（神の家族）
9. イエスの譬えの読解プロセスと神の国の開示
譬え解釈の手順：聖書学、神学、文学、哲学の分裂状況を超えて。
 0) 予備的考察（文学的・歴史的・思想的）
 1) 歴史性（テキストのレパートリー）
 2) 文学性：構造分析 / 譬えの文学的機能・効果 / 読解プロセスの再現
 3) 思想性・思想理解：神の国はいかなる仕方で現前するか、何をもたらすか。
 ↓
 三重のミメーシス（解釈学的プロセス）
 ミメーシス1 / ミメーシス2 / ミメーシス3
 歴史性 言語性（文学性） 思想性

<「ぶどう園の牢労働者」の譬え>：マタイによる福音書の20章1～16節

1a + 1b ~ 15<1b ~ 7 + 8 ~ 10 + 11 ~ 15> + 16

20:1 「天の国は次のようにたとえられる。

ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。2 主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。3 また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、4 『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。5 それで、その人たちは出かけて行った。主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。6 五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、7 彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。

8 夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。9 そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。10 最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。

11 それで、受け取ると、主人に不平を言った。12 『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとはいけません。』13 主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。14 自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。15 自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』

16 このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」

(1) ミメーシス 1

10. 「先行理解」(Vorverständnis)

- ・ 解釈者の世界理解と自己理解 (存在連関・意味連関の理解)

「古い自己」の存在形態 (古い生の形態化)

→ 行動世界の暗黙の前提的理解

- ・ テキストの作成：実践的行動世界の再現 (創造的模倣)、「テキストのレパトリー」

→ テキストの文献学的歴史的研究の対象

11. 「ぶどう園の労働者」読解の先行理解 (先行理解 2 についての理解を含む先行理解 1)

1) イエスの譬えが語られた状況についての知識。敵対者との論争、教育、宣教における譬えの語り。イエスの譬えの聴衆として弟子、論敵、そして民衆が存在することを、読者は理解している。

2) イエスの譬えがしばしば神の国の譬えと言われること。これは「ぶどう園の労働者」を「神の国の譬え群」の中で読むように促す。

「譬えをもちいて話す理由」(マルコ 4:10-12)

3) 古代ユダヤ社会の経済状況。極端な階層社会。一握りの大金持ち・権力者と大多数の小作人・日雇い労働者。日雇い労働者の悲惨さ。この日常世界の中の出来事。

第二シーンまでは想定可能な物語の展開。

4) 労働時間に応じた賃金の支払いは通常当然期待されるべき慣習であり、それは古代

の状況にも妥当する慣習的知識に属する（合理的な応報論理）。＝ミメーシス 1
5) イエス時代の農業労働者の現実（日雇いの労働にありつける保証はない→「罪人」）。1 イデナリオンは一日の賃金として標準的。

(2) ミメーシス 2

・構造：1a

1b-2 / 3-5 / 6-7 最初に雇われた人：悲劇（上昇→下降）

8-9 / 10 最後に雇われた人：喜劇（下降→上昇）

11-12 / 13-15

12. 書記化されたテキスト→固定された自律的な存在、完結した形態と構造を持つ対象
ミメーシス 2：テキスト・物語のプロットが行動世界の構造の再現・創造的模倣

13. イーザーの読解行為の現象学と読解の問題

14. 読解行為：「主題—地平」構造

テキストの構造と読者の意識（想像力）との相互作用

→テキスト世界の開示（読者の意味了解の世界へ。意味から指示への意味論的運動）

→イメージ・形態的意味(Sinnkonfiguration)の形成（読者の意識の内部）

統一的な意味の地平（首尾一貫した意味）の形成・形態的意味

イメージ形成の自己修正的な動的プロセス

15. 「ぶどう園の労働者」の譬えの読解プロセス（モデル化・理想的な読解）

①テキストの構造・三幕構成：

第1シーン：状況 第2シーン：危機 第3シーン：解決

逆転構造の認知・悲劇的な下降運動（ヴァイア）

②ミメーシス 1 の知識に基づく聴衆の視点の追構成

最初の労働者の期待と不満の理解

③聴衆の視点の追構成に基づくテキストの構造の把握

・最初の労働者の問いの共有、読者における聴衆との自然な同化

・期待はずれ、日常性（応報倫理・慣習的知恵）の異化作用

・譬えの構造の認知：驚きと期待感の逆転

読解を通じて形成される新しいイメージ（同じ賃金、驚くほど気前の良い雇い主）と読者自身のミメーシス 1（日常的な実践的世界理解）とは際だったコントラストにおいて対照され、二つの現実理解の衝突を生じる。

④イメージ形成の連鎖と読者の意識との融合→読者の感性に語りかける神の言葉

⑤「イエスの譬え＝神の国の譬え」→イメージ化された形態的意味は新しい現実（神の国）を指示

「～として見る」という仕方で現実を二重化する隠喩機能

⑥イメージは新たな思考を呼び起こす→第3シーンの読解過程

「別の現実」の開示（第二度の指示、ユートピア的）

↓ 「貧しい人は幸いである。神の国はあなたがたのものである」の成立する世界

③→喜びと不平のコントラスト、日常性に対する異化作用

読者は既存の知識の反省に導かれる。自己の相対化

・日常性・自明性への反省→社会構造の歪みと「支配—被支配」の諸コード

・現実理解の転換（転換的知恵）

・神の絶対的な活動性→神の信頼するとはいかなることか？

Luther: Alleinwirksamkeit Gottes / sola fide

- ・問いの転換：そもそも公正、正義とは何か？
近代人としての政治・経済システムへの適応は、正当か？
どちらが人間的か、人間にとって労働とは何か。

(3) ミメーシス 3

16. Norman Perrin, *Jesus and the Language of the Kingdom. Symbol and Metaphor in New Testament Interpretation*, Fortress 1976 pp.201-202

解釈はどこで終わるのか。解釈は自己の変容・拡張において、実践的世界の再編において終了する。これを「信仰」と呼ぶ。

17. 「15.の⑥」＝新しい生の可能性の開示→実践的行動世界を再編（ミメーシス 3）

新しい自己への転換であり、イメージを媒介とした自己の転換・修正・拡張・反省。
キリストと同じ形になる。 cf.キルケゴールの同時性

18. イエスの譬えにおける神の国の到来（「言葉の出来事」）

＝読者あるいは聴衆の悔い改め（感性の転換、実践的世界の転換）

＝譬えの読解における神の国のイメージ形成とその自己化による自己変革プロセス
「キリストの形」になるプロセス

イエスの譬え→パウロのキリスト論、信仰義認論。

19. 「神の国の譬え」という視点で何がわかるか。

- ・最初に雇われた労働者の不満＝聞き手の不満
- ・イエスの答えに設定しての驚き
社会的慣例（労働時間に比例した賃金）の無視とも見える主人の気前よさ
- ・神の国とは何か。
神の驚くべき恩恵（一方的な贈与）。神の国に入ることは喜ばしい驚きである。

↓

20. 思想から行動（倫理）へ

- ・聞き手自らの状況についての批判的な反省
個に分断された労働者の状況：他者の幸運をうらやみむ暗い情念
→この状況で新しい共同体＜分かち合い＞はいかにして可能になるのか
貧しいことが幸いとなる共同体的現実とは？
平等・連帯？ 家族とは？
- ・神の国の恩恵的性格と制度化の関わり。
神の国は制度の枠組みを超過している（＝気前よさ、開かれた食卓はここに生成する）。
しかし、この「気前よさ」は人間社会の制度にとっていかなる意味をもつか。
- ・神の国は、特に社会的弱者にこそ開かれている。神の国の弱者への共感。
公平・正義とは、機械的な平等か。最低限の生活の保証が優先する。
- ・「最低限度の人間らしい生活を保証する制度」の意義。
制度になることによって、それを悪用する人々が出てくる。しかし、それはこうした制度の存在意義を否定するものではない。

↓

近代の福祉国家の基本理念！

生活保護は、神の恩恵の制度化ではなかったのか。しかし、それを悪用する人間も生じる。

<まとめ>

ミメーシス 1, 2, 3 の全プロセス=信仰のダイナミズムのモデル

他者の現実に関感できる心・新しい存在

共感的な人間性、他者への開放性→神と他者へと開かれた自己→愛の実践

<参考文献>

1. Marcus J. Borg (ed.), *Jesus at 2000*, Westview Press, 1997.
2. John Dominic Crossan, *The historical Jesus*, HarperSanFrancisco, 1992.
3. Klaus Berger, *Exegese des Neuen Testaments*, Quelle & Meyer, 1977.
4. Paul Ricoeur, *Biblical Hermeneutics*, in: *SEMEIA* 4, 1975.
, *Temps et Récit* 1,2,3, 1983-85.
『時間と物語 I、II、III』新曜社。
5. Wolfgang Iser, *Der Akt des Lesens*, W.Fink (UTB636), 1976.
『行為としての読書 美的作用の理論』岩波書店。
6. Robert C. Holub, *Reception Theory. A critical introduction*, Routledge, 1984.
7. Umberto Eco, *Interpretation and overinterpretation* (ed. by Stefan Collini),
Cambridge Univ. Press, 1992.
8. Robert Scholes, *Protocols of Reading*, Yale Univ. Press, 1989.
9. Robert Detweiler, *Breaking the Fall. Religious Readings of Contemporary Fiction*,
Macmillan, 1989.
10. Frank Kermode, *The Sense of an Ending*, Oxford Univ. Press 1966.
11. 大貫隆『福音書研究と文学社会学』『イエスという経験』。岩波書店。
12. 芦名定道「宗教的認識と新しい存在」『哲学研究』第559号、京都哲学会 1993年。
「キリスト教信仰と宗教言語」『哲学研究』第568号、京都哲学会 1999年。
13. John Diminic Crossan, *In Parable. The Challenge for the Historical Jesus*, New York, 1973.
14. Norman Perin, *Jesus and the Language of the Kingdom*, Fortress, 1980(1976).
『新約聖書解釈における象徴と隠喩』教文館。
15. Daniel Patte, *What is Structural Exegesis ?*, Fortress, 1976.
16. Paul Ricoeur, "The Language of Faith / Listening to the Parables of Jesus," in: Charles E.
Reagan and David Stewart (eds.), *The Philosophy of Paul Ricoeur*, Beacon Press, 1978.
17. Eduard Schweizer, *Jesus, das Gleichnis Gottes*, Göttingen, 1996(1994).
18. 宮本久雄『福音書の言語宇宙 他者・イエス・全体主義』岩波書店、1999年。
19. A.E.マクグラス「第六章 開かれた秘密」、『「自然」を神学する』教文館、2011年、166-174、
189-195頁。
20. J・エレミアス『イエスの譬え』新教出版社。
21. W. ハルニッシュ『イエスのたとえ物語 隠喩的たとえ解釈の試み』
日本基督教団出版局。
22. 荒井献『問いかけるイエス 福音書をどう読み解くか』NHK 出版。
第一四講 「一デナリオンの約束」——「ぶどう園」の労働者のたとえ
マタイ二〇・一一—一六